

特別賞 丸善雄松堂賞

『かのように』 森鷗外著

政治経済学部 経済学科 2年 百瀬耕平

世の中に絶対確かなものなどない。ただ、神がいるかのように考えることで宗教が、線があるかのように考えることで数学が、義務があるかのように考えることで倫理は成り立つ。逆に言えば、そうであるかのように考えなければ、全ての土台は崩れ去り、世界は成り立たなくなってしまう。誰もがそのような思案をした経験があるのではないだろうか。そしてその後、大方の人間は日常を生きるため、それらなるべく考えまいとする。しかし、この話の主人公秀麿はそれができない人間だった。

秀麿は子爵の子として生まれ、大学の歴史科を優秀な成績で卒業し、優等生として留学する秀才だった。彼は、歴史家としての道を全うするために、まず神話と歴史を分けなければならないと考えていた。神を信じることはできない。だがそれを否定して体制を壊したいわけではない。存在するかのように考え、信仰することで、体制も学問も成り立たせられると考えたのである。しかし、当時は神話が体制を支えている時代。それは危険思想と言われかねない道である。「構わずずんずん書けばよい」と言う友人に対し、何とか妥協する道はないかと悩み苦しむのだった。

科学の時代と言われて久しい今でも、権威も宗教も依然存在する。僕は、それら合理や科学で捉えられないものを、理解しがたいと、心のどこかで軽視して考えてしまうことがあった。だが、この話を読んで、権威や宗教によって保たれる秩序も現実的に存在するのだと気が付いた。最近聞いたものにも、それを示す話が二つある。

一つは、タイの国王ラーマ9世が、「暗黒の5月事件」において衝突する両首謀者を叱りつけ一夜にして事態を鎮静化させたという話。もう一つは、イランの最高指導者ハメネイ師が、社会を二極化させるとして保守強硬派に大統領選の出馬を断念させたという話だ。

僕自身は、権威や宗教など、それらを盲目的に信じることはできない。だが、だからと言って安易に合理や科学を振りかざしそれらを否定するのも、間違っているのだと思い至った。そして、信じられないものも信じるかのように考え認めることは、盲目や思考停止とは違うのだと気が付いた。

これは、森鷗外が大逆事件の後、山縣有朋に危険思想対策を求められて書いた話だと言われている。この話では、暗に天皇の神話は否定されていると読み取れる。しかしその後、ハンス・ファイヒンガーの『かのように哲学』を引用しながら、信じられはしなくとも、信じるかのように考えるべきだと続く。折衷的ではあるが、盲目的な礼賛に走らず、体制と秩序を保とうとした森鷗外の真摯な姿勢には尊敬の念に堪えない。

この話は三十数ページ程と短く、文体も読みやすい。また文から伝わってくる明治時代の雰囲気も心地良い。ぜひ、この話を読むべきであるかのように考えてみてほしい。